

校長室より

第35号

「天空高き」



平成24年5月15日

目に青葉、山ホトギス、初鯉

先週出張で山口市に行きました。山陽自動車道を利用しましたが、高速道路から見える山々の緑が本当に目に鮮やかでした。

昨日も、たまたま錦帯橋の近くでスポーツをしていましたが、城山の緑もまた、本当にきれいでした。

小学生の児童がスケッチブックを片手に持ち、先生方に引率されている光景を見ましたが、彼らはこの時期の緑を一体何色の絵の具やクレヨンで表現するのでしょうか。

この時期の山の緑のもとには、カシ、シイやツバキなどの常緑広葉樹（照葉樹）があります。常緑樹ですが、春先に新葉が開いた後に、古い葉が枯れ落ちます。ブナ、ミズナラ、クヌギやカエデなどの落葉広葉樹は昨年の秋に一斉に落葉して、この時期に若葉が芽生えます。皆さんにはおなじみのスギ、ヒノキやマツなどの針葉樹もあります。

緑といっても、濃い緑（濃緑色）から淡い緑（淡緑色）まで何色もあり、5月の季節は本当にわれわれの目を楽しませてくれ、また目の保養にもなります。

明日から中間考査！

中間考査が明日から開始です。新入生にとってはテスト期間が3日間というのは初体験だと思います。

中学1年生の皆さんにとっては、英語や数学という初めての教科でのテストがあります。どんな問題が出題されるのか。高校1年生の諸君にとっては、中学校の時と比較して問題レベルがどう違うのか。不安と緊張が入り混じっていることでしょう。

中間考査に備えて大切なことが3つあります。

①しっかり計画を立て準備すること。②テストの本番では最後まで全力を尽くすこと。③答案用紙の返却後は間違っているところを見直し、理解することです。





一生懸命に取り組んできたなら、テストの点数は誰でも当然気に掛かります。しかし、大切なことはできなかったところを理解し、できるようになることです。そして、同じ間違いをしないように反省して、次回に備えることです。

ところで、皆さんに質問です。なぜ勉強しなければならないのでしょうか？多分、皆さんが生きている限り、勉強という2文字はいつも皆さんにつきまといてきます。

私は、勉強というのは、それ自体、すなわち勉強するということが大事なことだと思います。

勉強して得ることができたモノは、目には見えないものです。目には見えないけれども、それが皆さんの中で栄養分になっていくのです。皆さんが過ごす青春時代というのは、そういう栄養をたくさん身体の中に蓄えることのできる大切な時期です。ですから、一生懸命勉強しなければなりません。

ちょっといい話

ある席上で、他校の校長先生から嬉しい話を2つ聞きました。

本校の「柔道部の生徒が、この春の大会で試合会場のトイレのスリッパを揃えているのを見て、地元の人が感心されていた」というお話でした。

もう一つは、「選手が入学したときよりも良く伸びている」というお話。

2つのお褒^ほめの言葉を頂戴しましたが、トイレのスリッパを揃えるという姿勢が選手の成長につながっているのではないのか、と思いました。

本校柔道部員の心遣いが、学校外の人に感動を与えました。彼等の行動はきっと試合会場で大きな声援となって返ってきたことでしょう。私だって応援したくなります。そんな素晴らしい選手の指導に当たられている顧問の先生には、本当に心より感謝です。

豊かなことは ポケットの中でなく 心の中にある

想像力を鍛える！

5月11日に講演会がありました。講師はこの4月に宮城県立石巻西高等学校に就任された齋藤校長でした。齋藤校長先生は3月までは石巻西高校の教頭先生でした。

「忘れないこと 伝えたいこと 育てたいこと」という演題で2時間30分、たくさんの資料を用意して、本当に熱心に語られました。

その中で特に印象に残っているのは、今年入学した200名の新入生のことでした。

新入生は1年前の東日本大震災の影響で、まともな家庭生活、社会生活や学校生活を送ってくる事ができなかったということでした。

中学3年生の1年間は満足できる学習環境の中で、授業や学校行事を受けることができず、その影響がこれからの高校生活において徐々に現れてくるのではないかとということ、とても懸念^{けねん}されておられたことです。

私は震災から1年以上経過し、我々が手軽に入手できる新聞やテレビ等の情報に頼り、頭でっかちになっていることに、改めて気づかされました。

東北の地と山口の距離の遠さが、親身になって考えることを遠ざけていることに気づかされました。

震災から1年以上経過していますが、被災された方々が本当に大変なのはこれからなんだということ。そんな当たり前のことが、今共有できないでいる自分を恥ずかしく思いました。

日々闘っている彼らに対して想像をめぐらすことだけは忘まいと、強く自分自身に言い聞かせました。

帰	必	ま	ぼ	が	た	も	そ	で	ぜ	思	風	そ	な	見	
っ	ず	え	く	ん	め	の	こ	も	ん	い	景	こ	に	わ	ない
て	い	と	た	ば	に	を	に	も	ぶ			に	も	た	
く	い	ち	ち	っ	っ	と	あ	ど	ない			あ	ない	せ	
だ	い	が	は	て	て	り	っ	す				る		ば	
ろ	の	う	は	い	い	も	た					は			
う	が	が	る			ど						ず			
						す						の			

避難所の段ボールに書かれた仙台市立木町通り小学校6年生岩見夏希さんの詩



故きを温ね新しきを知る！

「一滴の水」の碑

初めて学園を訪れた人が、茶室のすぐ上から湧く水に、そう高くもない山なのにと驚く。

潮騒が聞こえそうなほど海を近くにして湧く清水は珍しい。

転出当時、水に不自由し、井戸や横穴を掘ったが水はすくなかった。当時水道がなく、生徒に水筒を持って来させたほどだった。

そのうちに市水道が引かれたが、天然の水も欲しかった。

今年三月、図書館の敷地の造成をすると、水脈が変わったのか、水が湧き出した。

私はときおり、湧き水のほとりに立つ。水は静かに間断なく出る。私は「曹源一滴の水」を思う。

茶道の本によれば「曹源」とは曹溪の源の意であり、その曹溪とは中国における禅宗興隆の土台を確立した六祖・大鑑慧能を指している。（曹溪は広東省韶州府叢峰山下の溪谷で、慧能がここの宝林寺に任して南宗禅を挙揚したので、彼を曹溪大師とも称した。）六祖の大成した南宗禅はその後、南嶽懷讓の法系と青原行思の法系とに分かれ、前者から臨済・僞仰の二宗、後者から曹洞・雲門・法眼の三宗を合わせて五宗（世に五家という）が分派し、臨済宗からさらに楊岐派と黄龍派の二派が分出し、世にいう五家七宗として栄え、さらに日本に二十四流の禅が伝わり栄えた。禅界をうるおす五家・七宗・二十四流は、みな曹溪に発した一滴の水を源とするものである。これを「曹源の一滴水」というのである。

「一滴、乾坤を潤す」とは、この史実を踏まえて、「曹源の一滴水、よく天下の禅界をうるおし、児孫を長養し、迷える衆生を救う」という、大鑑慧能に対する報恩感謝の意をこめた一句なのである。

茶室は学園図書館の一階で表千家松風楼になぞらえた造り。茶道部の活動もますます盛んになっているが、水はいうまでもなく、この湧き水を汲む。

高水学園に湧く一滴の水、それは不思議な縁というほかになく、私は今年九月のある日「一滴の水」ときざんだ碑を建てた。

出典「岩国転出の記」より